



<http://yahagigawa.jp>

## 豊田市矢作川研究所 月報

- ◆矢作川(昔～今～これから)
- ◆狂った花時計!
- ◆暖冬がもたらす水中の生物への影響
- ◆今年の暖冬理由
- ◆「川会議」開催のご案内

豊田市矢作川研究所

〒471-0025

愛知県豊田市西町2-19 豊田市職員会館1F

TEL 0565-34-6860 FAX 0564-34-6028

e-mail yahagi@hm.aitai.ne.jp

2007.04 No.107

# 矢作川(昔～今～これから)

鈴木信広

いい川とはどんな川でしょうか。人為的な影響が少なく、良好な河川環境が保たれている川だと表現できますが具体的にはイメージできません。私が持つ矢作川のイメージは昭和40年代の風景に遡ります。写真は岡崎市内の矢作川の空中写真ですが、当時はじめて見た矢作川は、川底の砂が水と一緒に動いていて、水に足を入れると砂が足に巻き付いてきました。まるで海岸の波打ち際にいるように心地よかったものでした。



岡崎市内の矢作川(昭和40年代)

また、しばらく後に訪れると、前には歩いて渡れた島(うろこ状砂州)が遠くに移動していました。それが30年以上過ぎた現在では、砂の層が薄くなり粘土層の露出も見られます。同時に砂利採取や土砂供給の減少により河床低下が進むとともに、流路が固定されたためうろこ状砂州が消失してしまいました。また、陸域と水域が明確に分かれ、陸域の乾燥化とともに樹林化が進行しました。以前は今の矢作川の姿を全く想像することができませんでした。

これまでの治水対策は、一刻も早く安全に洪水を海



岡崎市内の矢作川(現在)

に流すことを目的に、河道の直線化やコンクリート化などに代表される効率性を重視してきました。それにより人間があまりにも自然に手をかけたために、生物の多様性が低下し人間生活の基盤自体が危ぶまれる懸念さえ出てきました。そういう認識にたつて、行き過ぎを少し立て直そうと、平成2年度より「多自然型川づくり」が始まりました。しかしながらその設計内容も画一的な標準断面形で計画されたために、河床や水際を単調にすることにより、かえって河川環境の劣化が懸念される課題が残る川づくりが多く見られました。

多自然型川づくりの反省点としてまず挙げられるのが、川づくりの目標が共通認識として明確になっていなかったことです。本来は改修後十分に時間が経過した後の姿も予測した工事施工が求められたのに、完了直後の姿だけをイメージして工事を行った結果、自然度の高い河川を壊して「多自然型」河川を作った事例が多く見られました。また、工事も一時に全てを行わず、生態系を観測・観察しつつ様子をみながら行う

べきでした。また、多自然型川づくりが十分に理解されていないまま工事が行われた例もあります。例えば、多孔質な構造を作ったり石を使ったりすれば多自然型であるとの誤解があり、手段が目的化したケースもありましたし、個別箇所における工法の工夫などが河道の限られた部分に視点をおいただけの事例が多くみられました。

これらの反省点をふまえ、今後は「型」から脱却し河川全体の自然の営みを視野に入れた「多自然川づくり」を展開することになりました。これからは以下の3つのポイントを押さえて取り組みたいと思います。1点目は個別箇所から河川全体の自然の営みを視野に入れ

ること、2点目に地域の歴史・文化と結びついた川づくりを目指すこと、そして3点目として河川管理の全体の視点を忘れないこと、つまり治水・利水上の検討を行った後に環境面に配慮するのではなく、検討の初期段階より治水・利水・環境面から総合的な検討を行うこと、これらを念頭におきたいと思います。

川づくりは工事が完了した時点から物語（歴史）が始まります。何故なら川は自然を相手にしているので自然の応答をみる必要があるからです。技術者が現場にもう一度戻るチャンスを与えていると理解して、今後もいい川づくりを目指していきます。

（すずき のぶひろ、豊橋河川事務所 副所長）

## 狂った花時計！

中田良政

花時計、この言葉はこんな時には普通使わないが、あえて今年使ってみよう。

私の中では、この時計は今まで正確に時を刻んで来たと思っていたが、今年狂った。

その始まりは、逢妻女川の水源で、多くのため池がある白山町の山林に入ったときに見たミツバツツジ\*であった。通常では桜が終わる頃に山を歩くと、山道の脇に咲くものだと私の時計では記憶していたが、啓蟄がまだというこの時期につぼみが大きく膨らんでいたのである。2月の28日のことであった。

次の驚きは、いつもは3月下旬～4月初めに咲く我が家のツルニチニチソウが3月6日には満開となっていたことである（写真1）。余りにも早い咲きようであるために東京の友人に写真を早い春の便りとして送った。



写真1

例年であればツルニチニチソウが終わった頃に出てくるリコリスの葉までもがニョキニョキと出てき始めた。これも半月ほど早い気がする。

この文の執筆依頼が届いた4月3日に、写真撮影をかねて西広瀬から昭和の森、藤岡にかけてミツバツツ

ジを求めて走ってみた。依頼者に『今年の暖冬についていかがですか』と聞かれ、『ミツバツツジが早かったよ』と返したら反応してくれたので、彼の期待に応えるべく出かけた裏付けのためのドライブであった。

花を求めて走らせる窓の外の矢作川の土手では、8分咲きから散り始めの桜並木の下で主婦仲間がお弁当を囲んでいた。越戸保育園あたりの桜や、平戸橋の民芸館横の枝下用水の桜などを見ながら西広瀬の工場群へと向かうと、満開のユキヤナギが出迎えてくれた。その近くの、土手の植栽のツツジとこの辺りに多い松林の境にミツバツツジが多く見られた。土手を上って行ってみると、日当たりの良い所のミツバツツジの花は終りに近かった。

ここで撮ったのが写真2である。今年の春は暖かいと思いきや急に寒くなったり、目まぐるしく温度変化があったおかげで、普通なら順番に咲く白や薄青い花のハナニラ、薄紫のツルニチニチソウ、桜、ユキヤナギ、黄色い花のレンギョウなどが一度に楽しめた年だったのではないかと。得したような損したような気分である。そんな今日、関ヶ原、東京では雪が降っている。



写真2

※トウゴクミツバツツジもしくはコバノミツバツツジ

（なかた よしまさ、矢作川アユ天然調査会 会員）

# 暖冬がもたらす水中の生物への影響

山本敏哉

1月下旬に天然アユ調査会の今井紀幸さんより「アユの食い跡を高橋上流の矢作川で見つけた」との情報がありました(写真)。くっきりと石についていることから出来て間もない食い跡と推測されます。年魚として知られるアユは産卵した後にその短い生涯を終えますが、ごくまれに冬を越す個体のいることが知られています。湧水が湧いて冬でも水温が周囲より高い箇所などが、アユの越冬可能な場所となるようです。このことからすると、記録的な暖冬となった今年、矢作川中流にアユが生き残っていても不思議ではありません。

一方、三河湾でのノリ養殖は冬場の海水温が高かったために深刻な不作に終わったときありますが、海水温が高いために植物プランクトンが大発生して栄養をとられ、ノリにまわる栄養分が減ったのが原因と漁協の方が言われていました。逆に植物プランクトンがたくさん発生したことで、今年のアサリは豊漁が期待できる面もあるそうです。

気になる矢作川でのアユの遡上開始の状況ですが、

2月下旬からの碧南火力発電所温排水口におけるアユの調査では、昨年と似通ったサイズの稚アユが順調に採集されています。3月に入り寒い日が続き、遡上への影響が心配されましたが、明治用水頭首工では3月29日に初めて遡上が確認され、



アユの食い跡(今井紀幸氏 撮影)

4月9日時点で計2万4千尾余りが計数されています。昨年よりも1ヶ月近く早く、初期としてはまずまずの状況ですが、はたして豊漁になるかどうか「暖冬だったから成長は良いのでは」と「湧水だから良くない」という相反する予想の間でアユの釣り師が気をもむ日々が続いています。

(やまもと としや、豊田市矢作川研究所 研究員)

## 今年の暖冬理由

大和田道雄

今年の暖冬は、偏西風の一種である「寒帯前線ジェット気流」の蛇行が小さかったことが原因の1つである。本来であれば、東アジア地域には冬季に寒気が南下しやすい特徴がある。しかし、今年の寒帯前線ジェット気流は緯度に並行に流れており、寒気が南下できない状況にあった。こうした偏西風の状態は全世界的なもので、今年も東アジアのみならず北アメリカ、ヨーロッパでも記録的な暖冬となった。この寒帯前線ジェット気流の蛇行は周期的なものであり、昨年度の大雪もこの周期の一環としてみることができる。

しかし、過去に例をみない暖冬の要因は、これだけでは説明できない。日本列島の南の海上にある「亜熱帯高圧帯」は、今年特にその領域面積を拡大している。

この現象は、1970年代後半の急激な地球温暖化に連動している。このため、温帯と亜熱帯との境を流れる「亜熱帯ジェット気流」が北上しており、日本列島は次第に亜熱帯に近付いているといえる。また例年のない亜熱帯高圧帯の拡大には、東太平洋の熱帯海域の海面温度が高くなる「エルニーニョ現象」も関与しているようである。

したがって、今年の暖冬の原因は、「寒帯前線ジェット気流」の蛇行の小ささと、地球温暖化に連動し、エルニーニョ現象も関与していると考えられる「亜熱帯高圧帯」の拡大・北上により、西高東低の冬型気圧配置が少なくなったためである。

(おおわだ みちお、愛知教育大学 教授)

# 2007 矢作川「川会議」開催のご案内

矢作川「川会議」は、矢作川流域の自然保全活動を続けている諸団体ならびに関係機関が一堂に会して、「森～川～海」の健全な水循環と矢作川の良好な河川空間の保全と復元をめざし、これからの活動のあり方を話し合う場として毎年開催されています。

日程：平成19年5月12日(土)「矢作川の日」

●14：00～16：30 シンポジウム

・基調講演

・ディスカッション

「市民が描く矢作川」～河畔林を考える～

●16：45～ 交流会(参加費1,500円/人)

場所：古岸水辺公園(豊田市扶桑町)



2006 矢作川「川会議」

## 表紙の写真



### リョウブの若葉

山地でふつうに見られる、まだら模様の樹皮が特徴の落葉樹です。葉が救荒植物(凶作の時に食用となる植物)となるため、平安時代の農家はこの木を植えることを義務づけられていたそうです。

2006年4月13日 豊田市京ヶ峰2丁目 豊田市自然観察の森

撮影：吉鶴靖則氏

## 後記

春の暖かさを指摘する文章を集めてみましたが、花見は随分と肌寒いものとなってしまいました。皆さま、健康には十分にご注意くださいませ。

### \*\*\* 求む！「勘八音頭」が歌える方 \*\*\*

さて、研究所が事務局をつとめております「矢作川の歴史と将来像を考える会」では、ずいぶん以前から「勘八音頭」という楽曲の存在が指摘されてきましたが、このたび、豊田市民芸館のご協力を頂きまして、とうとうこの「勘八音頭」の全歌詞の入手に成功いたしました。しかし残念なことに、サビの部分を除いて、歌える人が見つかりません。一部だけでも結構ですので、この「勘八音頭」が歌える方、あるいはテープなどをお持ちの方がいらっしゃいましたら、是非研究所までご一報いただけますと幸いです。(高橋)

